

# 結婚の神様

櫛木理宇

第三回

3 (承前)

「次はいま流行りのファミリーウェディングだからね、張りきってお願い」

と蔵野が上機嫌で指定してきたのは、翌週日曜の、教会にほど近いレストランでの披露宴であった。

「今日は一緒の参加ね」

美しい微笑みとともに登場した百合香は、ウエストの切り替えにフリルをあしらったコーラルピンクのドレスに、ラメ入りのシヨールを合わせていた。

「あー、こっちブルーのドレスにしといてよかったあ。じつを言う

と今朝迷ったのよ」

と咲希は胸を撫でおろした。

色が白いためか、百合香は日本人には珍しいほどピンクが似合う。並んだらとうていかなわない。とてもファミレスで中ジョッキ三杯を空ける女には見えない。

「ねえ、次から事前にLINEでドレスの打ち合わせしとかない？色かぶりしないように」

「いいねそれ、賛成」

うなずいた百合香に、咲希が声を落として問う。

「ところで今日は、ファミリーウェディングって聞いたんだけど」

「あ、そうそう。いわゆる子連れ挙式ね。出来ちゃった婚——じゃなくて授かり婚のカップルにありがちな、『子供が無事生まれて、ちよつと手がかからなくなつてから、あらためて式しましょう』ってやつ」

「それもまた良しだよね。合理的だしアットホームだし」

「新婚旅行だって、妊娠中より産んでからのほうが行きやすいもんね。子供を両親に預けられたら、ひさしぶりの夫婦水入らずを楽しめて一石二鳥」

「そっかあ。そう考えるとファミリーウェディングも悪くな——」

咲希は言いかけて、かぶりを振った。

「いやいや、でもわたしたちみたいなサクラ動員の披露宴なんでも  
んね。順風満帆、手ばなしに幸せってわけにはいかないわよね」

「そんなことないって。べつにサクラ動員イコール不幸ってわけじ  
やないもの。ま、九割がた面倒なクライアントだったのは否定しな  
いけどさ」

百合香が肩をすくめる。

「ちなみに今日のお客についてくわしい裏話は聞けなかったけど、  
こまかい注文を付けるタイプじゃないみたいよ。新婦友人席で、に  
こにこ静かに座っていればいいだけだったさ。よけいな余興なし、  
スピーチもなし。ただし新郎側の誰かに話しかけられたときだけ、  
適当に話を合わせてほしいってのが向こうの希望」

「適当に、とは？」

咲希は眉根を寄せた。

百合香が片頬で笑い、

「臨機応変に、かつあいまいに、しかし笑顔だけは欠かさずに。『新  
婦の何々ちゃんとは学生のとき仲良くってえー』と先に言って、あ  
とは『えーよくわかんないですうー』『そうなんだ、すごいすね  
えー』『はじめて聞きました。ありがとうございますうー』を連呼。

ま、これでもいいの場はしのげるはずだから、咲希もあたしに合  
わせておけばいいわ」

果たしてファミリーウェディングの披露宴は大過なく進んでいった。

近くの教会で一時間前に済ませたという式は、両家の親のみ出席だったらしい。

しかし披露宴には新郎両親と新婦の母、新郎上司ならびに同僚、新郎親族、新郎実家の近隣住民、そして新郎友人、新婦友人のテーブルがそれぞれ用意されていた。

咲希と百合香は予定どおり『新婦御友人様』席に着いた。

ドレス姿の新婦は満一歳に満たないだろう息子を笑顔で抱いていた。スライドショーには新郎新婦の交際の写真だけでなく、子供が成長する映像も組みこまれていた。

費用を全体に抑え気味なのか、ケーキカットやお色直しは省略された。飾られている花は生花と造花が混ざり、ウェディングドレスもやや古めかしいデザインである。

だが新婦のドレスと同色の生地にくるまった子供は大泣きもぐずりもしなかったし、料理の品数も常識の範囲内だった。新郎友人の余興がいささか下ネタ系だったことを除けば、ほのぼのとした居心地いい宴うたげと言えた。

新郎新婦から実親への花束贈呈まで進んだところで、咲希は隣の

百合香にそっと耳打ちした。

「ねえ、なんでこの披露宴、サクラが必要だったの？ あの主婦さん、にこやかだし礼儀正しいし、すっごくいいママよね。友達いなさそうなタイプに見えないんだけど」

「言ったでしょ。今回はあたしもくわしいこと聞いてないの」

今日は自家用車で来たという百合香は烏龍茶ウーロンちゃのグラスを傾けつ

つ、

「……ただひとつ、さっきから気になってたことはこれかな」

と、テーブルの下で咲希に自分のスマートフォンを示してみせた。液晶には高砂たかさしを撮ったらしい動画が映しだされていた。

ゲストたちの歓談に合わせ、新郎新婦の前にもウェイターによって料理が供される。だが新郎がカトラリーを手にする前に、友人たちが高砂へやって来て声をかけ、カメラやスマートフォンを向けはじめた。新郎がそれに応え、席を立つ。

へビースモーカーなのか、新郎は高砂のテーブルでまで煙草たばこを吸っていた。新婦は赤ん坊を膝に抱き、友人たちに囲まれる夫の背を笑顔で見つめていた。

彼女の手が、つと灰皿へと動く。

咲希は目を見張った。

新婦は笑みを顔に貼りつけたまま、灰皿の灰をつまみあげ、静か

に夫の料理へ撒まいていた。一度ではなかった。何度も何度も、彼女の手は灰皿と夫の皿を往復した。

やがて夫が高砂に戻ってきた。だが彼女の笑顔はひとすじも崩れなかった。その膝では、丸まると太った息子が安らかに眠っている。

ふいに、新婦の顔が強張こわばった。

目がこちらを——いや、百合香のスマートフォンをまともにとらえている。どうやらカメラを向けられていると気づいたらしい。百合香が操作を切り替えたのか、そこで動画は終わった。

咲希は言葉もなく、液晶から視線をあげて百合香を見つめた。

「ほら、花束贈呈終わっちゃったわよ」

百合香が抑揚よくようなく言った。

耳障りなほど甲高い司会の声が響きわたる。

「新郎新婦から感謝の気持ちを込めた、花束贈呈でございました。皆様どうぞ御両家の親御様へ、あらためて拍手をお願いいたします」

……」

「あもう、すみません」

レストランから十メートルほど離れた専用駐車場で、咲希たちは背後から細い声に呼びとめられた。

振りかえってみて、息を呑む。

さきほどの新婦だった。お見送りを終えて大急ぎで着替えたのか、Tシャツにジーンズという格好だ。しかしヘアやメイクははまだ披露宴仕様のままであった。

奇妙にちぐはぐなスタイルで、彼女が深く頭を下げる。

「チェリーブラッサムから派遣された方ですよ。わたくし、このたび依頼をいたしました中島と申します。本日はほんとうにありがとうございました。助かりました」

すこし口ごもって、

「それで、あの、申しわけないんですが……」

「ああ、さっきの動画ですね」

百合香がスマートフォンを挙げる。

「大丈夫ですよ、悪用なんかしやしません。いまこの場で消しますから、どうぞご確認ください」

眼前の女にも見えるよう掲げたまま、百合香はスマートフォンからためらいなく動画を削除した。

中島と名乗った女の肩が、安堵あんどでほっと落ちる。

「申しわけありません、ほんとうに……」

「いえ、こちらこそ悪趣味な真似をしてすみませんでした」

謝罪する百合香に、「そうじゃないんです」と中島は首を振った。

「そうじゃなくて……お仕事とはいえ、わざわざご足労をかけてし

まいまして……わたしが至らないばかりに、ご迷惑をおかけしました。ほんとうに申しわけなく……」

「そんな。こっちはちゃんとバイト代が出るんですから」

百合香が笑った。

咲希も横から言い添える。

「そうですね。迷惑なんてとんでもない、楽しくていい御披露宴でしたよ」

だが中島は再度首を横に振り、

「わたしが不手際なのが、すべて悪いんです。心からお詫<sup>わ</sup>び申し上げます。なにをやらせてもらっても、うまくいかなくて……至りませんで……」

「いえあの、そんな。わたしたち、謝っていたくことなんて、なにも——」

「申しわけございません……」

中島がいま一度深く礼をし、顔をあげる。

今後こそ咲希はぎよっとした。

中島は見ひらいた両の眼から、ぼろぼろと大粒の涙をこぼしていた。披露宴の間じゅう浮かべていた完璧な笑みは拭<sup>ぬぐ</sup>ったように消えていた。

よく見れば彼女の頬も顎<sup>あご</sup>も吹き出物だらけだ。見る間に涙でメイ



クが剥げ、どす黒い隈があらわになる。荒れた唇は毛羽立ち、眼球には血の筋が走っていた。

「申しわけ……」

みなまで言わせず、百合香が中島の腕を掴んだ。

目をしばたたく新婦に、百合香はにっこり微笑んでみせた。駐車場の奥に駐めてある、グレーメタリックのランドクルーザーを顎で指す。

「あれ、あたしの愛車なんです。——どうでしょう、落ち着かれるまで中ですこし休んでいかれるというのは？」

咲希と百合香はスモークフィルムを張った後部座席に、静かに嗚咽を洩らす中島を間に挟むかたちで肅然と腰かけた。

「お時間大丈夫ですか？ 披露宴が終わったばかりですけど、二次会への移動とか……」

と問いかける咲希へ、中島が涙を啜って言う。

「いえ、二次会は予定してないんです。夫の友人は既婚者が多いし、それに、その、わたし側の友人がいませんもので——」

「あ、ああ、そうだ。そうでしたね」

咲希は慌てて何度も首を縦に振った。

「でもいきなり今日の主役がいなくなったんじゃ、いまごろ旦那さ

んも御両親も心配しているのでは」

「いえ」

中島はうつろな面おもてを咲希に向けた。

「あの人たちは、心配なんかしません。わたしがいなくなつて適当に言いつくろつてくれるでしょう。得意技だもの。全部その場しのぎのでたらめだとしても、表面上をきれいにごまかすのが、ほんとうに上手くつて……」

語尾が涙でふやけた。

中島はいま一度涙を啜りあげて、

「すみません、とつくにお仕事は終わったのに。延長料金をお支払いますね。会社のほうへお電話しておきますから、あとで明細書を確認しておいてください」

「いいんですよ、そんな」

慌てて言う咲希の横で、百合香が微笑んだ。

「ありがとうございます。ではアフター料金ということで一時間追加になりますが——」

わずかに前傾姿勢になり、中島の手をやさしく握る。

「もし吐き出してしまいたいことがお有りなら、丸一時間をかけてお聞きますよ。ご安心ください、お金をいただくぶん確実に秘密はお守りいたします」

中島がためらったのは、わずか数秒だった。

彼女は堰を切ったようにしゃべりだした。

夫とは二年の交際を経て結婚したこと。結婚にいたったきっかけは、避妊していたはずなのに妊娠してしまったからだということ。

つわりがひどく、出血や腹痛も激しかったため、「式も披露宴も出産後にして欲しい」と彼女から頼みこんだこと。夫と義両親は「せめてお披露目くらい」と渋りつづけ、彼女が切迫流産で入院してからようやく諦めてくれたこと。

義両親とは二世帯住宅で同居であること。しかし二世帯住宅とは名ばかりで、キッチンも風呂も共同であること。仕切りはあるが錠すると嫌味を言われること。

里帰り出産しなかったが許してもらえなかったこと。出産後、赤ちゃんを見せたくて母を招いたら、その後何日にもわたって姑しんせうから、

「いつまで娘気分にいるんだか」

「あんたはもう、うちの人間なんだからね。帰るところはもうないのよ」

「片親の子をもらってやっただけでもありがたいと思いなさい」とねちねち言われつづけたこと。

出産後わずか二箇月で仕事に復帰するよう命じられたこと。赤ん

坊の世話はほとんど義両親がおこない、抱かせてもらえるのは今日の  
ような人前に出る場か、義両親が寝静まってからしかかないこと。

共働きなのに夫は家事をいっさいせず、育児にも関心がないこと。  
「母さんにまかせときゃいいんだよ」と言うばかりで、彼女の訴え  
にはまるで耳を貸してくれないこと。

「……………疲れちゃったんです」

中島はぼつりと言った。

「式も披露宴も、いまさらやりたくなかった。でもお義母さんも夫  
も、『約束しただろう』、『おまえのためを思ってやってやるのに恩知  
らず』、『もうみんなに知らせてあるのに、中止なんてみつともない  
真似はできない』と言うばかりで……」

だから彼女は精一杯のボイコットをはかったのだという。

準備のほとんどはプランナーに丸投げした。料理も花もなにもか  
も、一番安いコースを選んだ。ウエディングドレスはネットオーク  
ションで一万円以下の中古を買って持ち込むことにした。

招待状は夫から、

「おまえがパソコンで作って、たいあん大安に発送しとけよ」

と言われたので、はいはいとうなずくだけで一通も手配しなかつ  
た。

ボイコットが発覚したのは、式の三週間前だった。

「いつまで経っても招待状が届かないが、どうかしたか」

と夫の友人から問い合わせがあったのだ。

当然彼女は責められた。罵声ばせいを浴び、軽くだが平手で打たれた。しかし怒りも悲しみもなかった。驚くほど、なにも感じなかった。

夫と義両親はプランナーに泣きつき、急遽きゆうきよ招待状を刷ってもらった。

郵送している猶予ゆうよはなかったので「式場の不手際」ということにして、夫の上司や親族、御近所へ手渡ししてまわった。夫の友人たちへはメールとLINEで済ませた。

だが新婦である彼女は、頑がんとして動かなかった。

さすがに実母は招かないわけにかなかったが、友人と同僚の招待はかたくなに拒こばんだ。理由は「わたしの大事な人たちに、お金をかけさせてまで茶番を見せたくない」からであった。

チェリーブラッサムに依頼すると提案したのは、そもそも夫だ。

上司と近所の人の手前、新婦友人席ががら空きでは恥ずかしいと彼は主張した。

しかしいざ派遣が決まってしまうと、

「金を払ってサクラを頼むなんて」

「支払いは、おまえの独身時代の貯金から出しとけよ」

と夫は高圧的に言いはなった。彼女はもはや反論する気力もなく、

無言でうなずいた。

「——それが今日、御社へ派遣をお願いしましたいきさつです」

中島はうつむいたまま言った。

咲希は言葉を失っていた。

これはひどい。あんまりだ。とても現代の家庭とは思えない。『女工哀史』や、『どん底の人達』と同時代の話かと疑ってしまいそうだし、しかし目の前には、やつれて青黒い顔をした中島が肩を落として座っている。

彼女の存在はまぎれもなく現実だった。そして嘘をついているようには思えなかった。虚言をひねくり出す気力など、体の底にも残っていないさそうだった。

「失礼ですが、離婚を考えたことは？」

百合香が静かに問う。

中島は首を横に振った。

「夫と別れるのだけは、避けたいと思ってます」

「それはまた、どうして？」

中島はわずかに口ごもり、

「うちの両親は、わたしが小学生のときに離婚しまして……それから三年以上、わたしはチックや片頭痛に悩まされました。人と触れ

あうのが怖くなって、不登校にもなりました。ようやく人並みの生活が送れるようになったあとも、片親どうこうと言われて何度かいやな目に遭<sup>あ</sup>ってきましたし……。自分の子供には、わたしが味わってきたような思いをさせたくないんです」

「そんな」

そんなこと——と言いかけ、咲希はつづく台詞が思いつかず黙った。

どうやら中島は育休をとれる規模の会社に勤めているようだ。ならばすっぱり離婚して、日中は子供を実母に預け、働きながら子供を育てたほうがいいのでは、と第三者としては思う。

しかし「子供のために離婚したくない」という彼女の気持ちを、他人の立場から言下に否定はできなかった。

咲希自身は、両親揃っていないからという理由で誰かを見下したことはない。だが世の中に、偏見を持った人間は確かにいる。しかも少なからず存在する。わが子の行く手から、障害はできるだけ排除しておきたいという親心は理解できた。

でも。

——でもあなただけが我慢して生きるのは、おかしいのではないか。

あなただって幸福になる権利があるのではないか。あなたは苦し

むために結婚したのではないはずだ。あなたの親御さんだって同様に、わが子が不幸でいるのを見たくないだろう――。

そう言いたかった。しかし安易に口にできる台詞でもなかった。

もどかしい思いで、咲希は唇を噛んだ。

百合香が平坦な声で言う。

「……そうですね、中島さんがそう心に決めていらっしやるのであれば、是非ともそうすべきです。横から誰かが口出しすることじゃありません。とくにあたしたちのような、行きずりの無責任な人間が」

彼女はつと人差し指を立て、

「でも老婆心で、ひとつだけ言わせてもらいますね」と微笑んだ。

「――この世には、親が離婚したせいでつらい思いをした子”もいれば、親が離婚してくれなかったから、つらい思いをした子”というのがあります。絶えず父親や祖母に侮蔑おべつされる母親を、毎日眺めていなくてはならない子供はけっして幸せじゃない。喧嘩ばかりの両親を見させられる子供も、父親に殴られる母親を見て育つ子もそうです。輝かしく楽しい子供時代とは、無縁です」

中島の顔を覗きこみ、百合香は駄目押しのように言った。

「いますぐでなくてもいいです。この先の何年かをかけて、そのこ



とを考えてみてください。ほんとうに子供のためを思うなら、どんな道を選ぶのが最善なのか——どうかゆっくり考えてくださいね」

おぼつかない足取りで去っていく中島を見送って、助手席に移った咲希は重苦しいため息をついた。

「大丈夫かしら、あの人」

「さあね」

スマートキイでエンジンを始動させながら百合香が応じる。

「大丈夫じゃないかもしれないけど、そこはもうしようがないですよ。あたしたちみたいな、たかが派遣のサクラにできることなんか限られてるもの」

「うん、それはまあ、そうなんだけど」

「前にも言ったけどさ、結婚は人生のゴールじゃないのよ。お伽とぎばなしなら『かくしてお姫様は王子様と結ばれました。めでたしめでたし』で終わるけど、あたしたちは結ばれたあとだって否応なしに人生つづいていくんだからね」

百合香はカーナビに合路家あいじの電話番号を入力し、ハンドルを握った。

「幸せになりたいなら思考停止しちゃ駄目よ。その都度ちゃんと、自分の意志でもって選択していくのが大事」

ランドクルーザーが駐車場を出て、国道へ向かうべく左折する。  
「昔の偉い人は『結婚前には両目を大きく開いて見よ。結婚してからは片目を閉じよ』なんて言ったらしいわよね。でも結婚してからのほうこそ、両目で相手を見なきゃいけないとあたしは思うのよ。離婚はいつでもできるからーなんて言って、問題を先延ばしにする人が多いけどさ。そういう人を見るたび『人生って八十年しかないのよ？ 意外とタイムリミット短いよ？』って言いたくなっちゃう」  
なかば独り言のように語る百合香に、

「ああ、うん……」

と咲希はあいまいな相槌あいづちを打つしかできなかった。

——結婚って、なんなんだろう。

いままで自分が思い描いていたような、甘ったるいものではないとさすがに思い知った。でもけして苦いだけでもないはずだ。

他人だった男女が恋に落ちて、もしくは誰かの紹介で出会って、一生をともしにする相手としてお互い契約を結ぶ。

なんともロマンティックだ。そして怖い。いまの咲希には、その怖さがおぼろげながら理解できる。

——幸せになりたいなら思考停止しちゃ駄目よ。

——その都度ちゃんと、自分の意志でもって選択していくのが大事。

助手席のウインドウ越しに流れる景色に、咲希は目を細めた。

4

その週、咲希は発熱した。

電子体温計は三十八度七分を表示した。こんな高熱は十年以上ぶりだ。医者はインフルエンザではないと診断し、「たちの悪い風邪でしよう」と熱さましを処方してくれた。

咲希は畳にのべた布団に横たわり、うるんだ瞳で天井の木目を眺めていた。

発熱とはこんなに苦しく、こんなにも寒気が激しいものだっただろうか。夏まつさかりの和室はむっとするほど暑い。なのに掻巻かいまきにくるまっつけていても寒い。

妹の香耶かやには「知恵熱じゃない？」などと失礼な台詞を吐かれた。だが、反論できなかった。なにしろここ一箇月で、常の倍は知らなくていいことばかり知った気がする。精神的ストレスは人間の免疫力を低下させる。

——百合香はあのサクラのバイト、どれくらいの期間やってるんだろう。

百合香が見かけに反してタフな女性だとはもうわかっている。で

も彼女でさえ、やっぱり最初は精神的に参ったりしたのだろうか。

「想像つかない……」

そうつぶやいたとき、襖ふすまが開いた。

「お姉ちゃん、起きてるかい」

入ってきたのは香耶だった。

近所のスーパーのマークが入った袋を、姉に向かって掲げてみせる。確か今日の講義はみっちり五限までだったはずだ。どうやら咲希がうつらうつらしているうちに、とっくに陽は暮れてしまったらしい。

「どう、生きてる？」

「……駄目かも……」

咲希は枕から首もあげずに呻うめいた。

香耶が苦笑する。

「ポカリ買ってきたよ。あとはアイスクリームとフルーツゼリーと、

旬はっさくだから八朔も買ってきてみた」

「ありがとう。でも、とりあえずポカリだけでもらう……」

さすがの咲希でも、この高熱では食欲が出ない。一昨日、夕飯のカツ丼を残した時点で気づくべきだった、あのときすぐに葛根湯かつこんとうを飲んでいれば——といまさらながら後悔が押し寄せる。

香耶が布団の横へ腰をおろし、

「おかゆも食べてないんでしょ？ 駄目だよ。なにか食べないと薬飲めないじゃん」

「わかってるけど、いまは無理……。香耶ちゃん、せっかく買ってきてもらったのに悪いけど、代わりに食べちゃって」

「そう？ じゃあアイスいっただきまーす」

そうかい  
爽快なほど現金に、香耶は袋からカップアイスを取り出した。

自分で食べる可能性をはなから計算に入れていたらしく、ハーゲンダッツである。しかも香耶自身の好物であるチョコレートブラウニーだ。

幸せそうにチョコ味のアイスを舐めながら、

「あ、そういえばシロちゃん来てるよ」

と思いだしたように香耶が言う。

「え！」

途端に咲希は跳ね起きた。

「なんで！」

「なんでって、おばさんの実家から野菜がいっぱい届いたから、おすそわけだって。いま下で、お母さん相手にお茶飲んどくとこよ。

お姉ちゃんは寝込んでるって言っといいたから、もうちよつとしたらお見舞いに来ると思うけど」

「香耶ちゃん！ それを早く！ 言っつてよね！」

スタッカートを効かせて咲希は叫んだ。

こうしてはいられない。こんな顔のこんな格好では、とても長年の想い人には会えない。昨夜はかろうじてお風呂に入ったけれど、熱のせいで汗をかいたから全体によれている。髪だって寝癖だらけだ。おまけに当然すっぴんである。

咲希は三面鏡の前へ正座し、大急ぎで髪をとかした。

拭き取り用化粧水で顔を拭き、保湿化粧水をはたき、美容液とクリームを塗った。せめて下地とパウダーだけでもと思っていたはずが、気づけばコンシーラーを部分使いし、ファウンデーションを掌てのひらにとっていた。さらにビューラー、マスカラと慣れた手順で進めていく。

約五分後、襖のへりがノックされる音がした。

布団に横たわったまま咲希は答えた。

「どうぞ」

襖を開けた瞬間、史郎しろうが一瞬立ちすくむのがわかった。

古式ゆかしい花模様の掻巻かまきに包まれた、顔面だけフルメイクの幼馴染おなじみを彼が無言で見おろしている。

「どうしたの、シロちゃん」

「……いや、なんでもない」

すでに室内に香耶の姿はなかった。アイスを食べ終えてすぐ退室

したらしく、ポカリスエットと八朔みかんだけが枕もとに残っている。ゼリーも今ごろは香耶のお腹の中だろう。

妹の代わりのように、史郎が同じ場所へあぐらをかいた。

「風邪だつて？ 薬飲んだのか」

「まだ。食欲なくつて」

「例のバイト先でもらってきたんじゃないのか」

「うん、そうかもしれない……」

咲希はおとなしくうなずいた。風邪だとしても知恵熱だとしても、原因はそこ以外考えられない。

発熱時の心細さからか、咲希の口からぼろりと言葉がこぼれた。

「——ごめん。じつはね、バイトってサクラのバイトなの」

「サクラ？」

史郎が眉根を寄せる。

どういう意味だ、と訊きかえす彼に、咲希はああでこうでこういうバイト、と乾いた舌をもつれさせながら説明した。

史郎の眉間の皺みけん しわが、ますます深くなっていく。

「大丈夫なのか、その仕事」

「香耶ちゃんの紹介よ」

「そうか、なら大丈夫か」

史郎はあっさり首肯しゅくごうした。

合路家ならびに今居家いまいにおいて、昔から香耶の評価は異常に高い。とくに香耶が高校生になった頃から、「咲希一人じゃ頼りないから、香耶ちゃんについていってもらいなさい」、「香耶ちゃんの言うことを聞くのよ」などと扱いが完全に姉妹逆転するようになった。咲希としてはいろいろ納得のいかない思いであった。

史郎が八朔みかんに手を伸ばして、

「まあ、バイトそのものはいいでしょう。でも発熱の原因はなんなんだ。なにか心あたりはあるか？」

と尋ねた。

「うーん……」

咲希は肘ひじを突いて上体を起こした。

ポカリスエットのキャップをはずし、一口含む。水分と糖分の滋味が舌に染み、唾液腺だみせんが痛んだ。

「……心あたりというか、ちよつとシヨックな話は聞いたかな」

先日聞かされた中島の結婚生活を、訥々とつとつと咲希は語りはじめた。合間合間に己の感想を挟んだせいでとりとめがなくなり、自分でもなにを言っているのかわからなくなった。だが、それでも最後までしゃべりとおした。

語り終えたときには、だいぶ頭はすっきりしていた。手にしたペットボトルの中身は半分以下になっていた。



はっとして咲希は壁の時計を見た。

いつの間にか一時間以上が経過している。

「うわ、ごめんねシロちゃん、こんなに長く付き合わせちゃって。

仕事帰りだったんでしょ？ 疲れてるのにほんとごめん」

「いやべつに」

史郎はかぶりを振り、「まあ、またなにかあったら言えよ」とだけ  
言って立ちあがった。

「じゃあな」

「あ、待ってシロちゃん」

慌てて咲希は呼びとめた。

「なんだ？」

「……みかん、食べていなくていいの？」

指した先には、史郎が剥き終えた八朔やっしやくがあった。放射状に裂いた  
厚皮を器にして、きれいに剥かれた八朔の実が山盛りになっている。

史郎はいま一度首を振って、

「それ食ったら、菓飲んで寝とけ」

「——シロちゃん！」

咲希は声をあげた。

しかし彼女が感きわまって「結婚して」と叫ぶ前に、史郎はいち  
早く部屋をすべり出てしまった。

襖が無情に閉まった。

## 第三章

1

その日『ホテル・アンジェレノ』で朝の部におこなわれた式と披露宴に、咲希と百合香はいつものごとく新婦友人として出席を請われた。

ただ常と違ったのは、式の前に控室へ通されて、ドレス姿の新婦本人から丁寧な挨拶を受けたことだ。

「このたびはご足労ありがとうございます。こちら、わずかばかりでお恥ずかしいのですが……」

と熨斗袋のしづぶろまで差し出された。咲希が「いえそんな」と断る前に、「まあ、ご丁寧ありがとうございます。謹んで頂戴いたします」

と百合香が素早く受けとってしまふ。

新婦の横へ寄り添う母親が、

「お恥ずかしい話ですが、この子の友人として呼べる相手が思いあたりませんで……」

と口にハンカチを当てて言った。

彼女たちが語ったところによると、新婦一家はいわゆる「転勤

族”であつたらしい。

とくに新婦が義務教育の頃はひどく、同じ土地に二年といられた例しがなかった。高校生になつてからも二度引越たぶしがあり、そのたび編入試験を受けさせられたという。

新婦の母が目頭に何度も指を当て、

「わたしもよくなかつたんですけどね。夫は家事どころか脱いだ上着をハンガーにかけることもできない人で、とても単身赴任なんてさせられなかつたんです」

と唇を嘔む。

「この子にはそのせいで、いらない苦労ばかりさせてしまいました。おとなしくて手のかからない子だからと、気づかないうちに親のほう甘えてしまつていたようです」

「転勤族の子供つて、それなりにコミュニケーション能力は発達するんですよ」

新婦が苦笑顔で言った。

「でもわたしの場合は、あたらさわず他人に合わせるスキルが上がつただけでした。少人数で遊べるような仲良しの友達は一人もできなかった。とにかく誰とも衝突せず、目立たず、いじめられないように、とそれだけを考へて生きてきましたから。だからいまの会社でも、挨拶と世間話以外の会話ができる相手はいません」

相談所を使ったとはいえ、われながらよく男性と結婚までこぎつけられたと驚くくらいです——と新婦は自嘲じちようした。

「上司と同僚三名はなんとか招待できましたけれど、そんなわけで祝ってもらえる友人が皆無かいはなんです。でもまさか、こんなに華やかで美しい方たちにおいでいただけるとは思いませんでした。本日はわたくしどものつまらない見栄のために、ほんとうにありがとうございます  
ざいます」

「いえね、御社にお願いしようと言い出したのはわたしなんですよ」

新婦の母が口を挟んだ。

「いまどきは『結婚はあくまで本人たちの問題』、『夫婦の意見さえ一致していればそれでいい』なんて言いますけれどね。そんなのはしよせん綺麗きれいごとですよ」

「綺麗きれいごとですか」

咲希が気圧けおされてつぶやく。

「ええ。恋愛のうちはよくても、結婚となれば家同士の結びつきですから。列席者でけちが付いたとなれば、先方さまにもご迷惑めいわくがかかるやもしれませんもの。わざわざ一世一代の晴れかしの日に瑕疵かしをあらわにすることはないでしょう。ビジネスライクに解決できるなら、それが一番ですわ」

「はあ」

彼女の堂々とした語気に、咲希は完全に呑まれていた。

「べ、勉強になります」

とつい頭を下げてしまう。

新婦の母は胸をそらして、

「娘へのせめてものお詫びに、御社への御支払いはわたくしども親が全額負担することになっております。どうぞ本日は華々しく美々しくお願いいたしますね。追加料金が発生してもかまいません。なにとぞ重々、よろしくお願い申しあげます」

かくして式に一時間、披露宴に二時間半を要したウェディングイベントは、新婦と新婦母の願いどおりつつがなく終わった。

百合香はそつのないスピーチをこなし、咲希は余興で『君の瞳に恋してる』を歌った。ブーケプルズはまだ十代の新郎従妹が引き当て、これはこれで盛り上がった。

「うん、申しぶんなしの披露宴だったけど……疲れた」

ソファに身を沈め、咲希はぐったりとつぶやいた。

「お母様みずからの意気込みと主張を事前に聞かされちゃあね。こっちも肩に力入っちゃうわよね」

百合香が笑って、紅茶のカップに口を付ける。

場所は『青扇殿』のティーラウンジである。二人は揃って夕の部の披露宴へ出席する予定であった。せめてそれまでの骨休みにと、最近話題のアフタヌーンティーを楽しみに来たのだ。

ソファにもたれた咲希の視界を、紺と灰色の団体がどやどやと横切っていく。

礼服ではないスーツに身を包んだ、恰幅のいい中年男性の一団だった。中の一人が先頭の男を上目遣いに見あげ、

「いやあ、まったく宝田先生にはかないませんな」

と見えすいたお追従を言うのが耳に入る。

——どこかで聞いたような声で、聞いたような名前だな。

咲希は銀のケーキスタンドからテーブルを一つつまみあげた。口に入れて味わい、飲みこみかけたところで「あつ」と膝を叩きそうになる。

——そうだ。この前の一之瀬家の披露宴で見かけた議員だわ。

窓際の席を陣取った一団を、あらためて咲希は目で追った。

議員におべんちゃらを言われる立場で宝田姓の男といえば、おそらく間違いない。いま上座にいるあの男は宝田寿行だ。つまり宝田美香子の二番目の夫で、ここ『青扇殿』の元社長である。

確か去年、会社に置いてある経済誌で寿行のインタビュー記事を読んだ。地元で名高い豪農一族の次男坊として生まれた彼は、宝田

家に婿入りしてからその商才で頭角をあらわしていったらしい。美香子と離婚したのちも旧姓に戻さないのは、

「この姓になってから運が向いてきたので、験かつきぎ」  
なのだという。

歳のころは五十代後半だが、寿行の容貌ようぼうに衰えはなかった。背が高く、肩幅が広く、鬢びんにすこし混じった白髪しろがすら色気がある。見るからにモテそうだ。

美香子との離婚理由が「女癖」であったことからしても、実際モテるのだろう。離婚調停の結果、娘の養育権と『青扇殿』の所有権を、慰謝料代わりに妻へ謙譲したという話であった。

——やっぱりいい男と結婚するってのは、それなりのリスクもあるのね。

シロちゃんは大丈夫かしらと、ふと咲希は考えた。

浮気なんかする人じゃないとは知っている。けれど、世の中には万が一ということがある。もしも、よしんば、万が一シロちゃんが結婚後に浮気したとしたら——。

ゆ、許せない。許せないけど離婚もしたくない。いや浮気じゃなく、本気になられてしまったらどうしよう。もしそうになったら、そうなったならわたしは、わたしはわたしはわたしは。

「ちよっと咲希、どうしたの」



無益な妄想を、百合香の白けた声が裂いた。

「さつきから窓のほうを睨んで、百面相しちやつてさ」

「えっ、ううん。なんでもないので。……あーっと、ええとね」

咲希は冷めた紅茶を一気に呷って、

「ま、窓の向こうの景色がさ、あのほら、いま話題になつてゐるらしいじゃない。ヒット中の『ラスト・サイレント』って映画のクライマックスによく似てるとか——」

「ああ、そうみたいね」

百合香がうなずいた。

「主人公がヒロインにプロポーズする場面の夜景にそっくりだって、そういやテレビで検証してたわ。北欧で撮られた映画だから、偶然の一致らしいけどねえ」

とスコーンにクロテッドクリームを重ね塗りしつつ言う。

「あ、そういえばこのあたりに、高層マンションが建つ予定があるらしいよね」

思い出した、と咲希は手を叩いた。

「ってことはそこに住んだら、年中カップルで『ラスト・サイレント』ごっこができるってことじゃない。ネットとかで評判になったら、入居希望者が殺到して全室が即埋まっちゃうかもよ」

「まっさかあ。そんな目的で、マンションなんていう一生に一度の

買い物をする人がいるわけない——とは、必ずしも言い切れないか。なにしろここ二十年で最高最大のヒットらしいもんね、あの映画」「そうなのよ、全米が泣きまくりで、歴代の記録も塗り替えまくってるんでしょ？ それにあやかっつて、マンションが人気物件になる可能性はかなり高いんじゃないの」

「ま、ほんとに建つとしたらだけどね」

咲希の言葉を百合香はかるくあしらって、

「映画なんて観るものであって、生身で体现するもんじゃないわよ。——ねえ、やっぱりコースにシャンパンも追加しない？ まだスコーンもサンドイッチも残ってるしき、グラス一杯くらいいいでしょう？」

## 2

夕の部は前回より一時間早い、午後三時からの開宴であった。

そして三時十分には、すでに咲希はこの日のバイトを引き受けたことを後悔していた。

——精神的にしんどい披露宴は、いままでも何度か経験してきたけど。

気象庁によれば、今日の最高気温は三十八度。風はなく、蒸し暑

く、四方八方から鳴り響く蟬の声が不快指数をさらに増大させる。

——こんなに肉体的につらい披露宴は、これがはじめてだわ。

灼熱しゃくねつの中庭に一同は集められていた。

青扇殿にはめずらしい純洋式スタイルのガーデン披露宴である。

アーチやテーブルに飾られた生花は、早くも萎れしおはじめていた。

全員が玉のような汗をかいている。ハンカチで拭いても拭いても、頭皮から噴きだした汗が頬へ、顎へとつたい落ちていく。十二分に塗ってきたはずの日焼け止めも、このぶんではじきに溶け流れてしまいそうだ。

薄いドレスの女性陣はまだまだですが、スーツ姿の男性たちはまるで苦行に耐えるかのような面持ちであった。

せめて日除けのテントでもあればいいものを、頭上にはどこまでも青空が広がり、ぎらつく陽光が降りそそぐばかりである。

そんな招待客を後目しりめに、新郎新婦は笑顔でケーキ入刀を済ませ、「ではファーストバイトです。大輔だいすけさん、千絵梨ちえりさん、美味おいしそうですね、どうぞ！」

との司会の声に合わせて、「あーん」とケーキを食べさせあったりなどしている。

「なにがファーストバイトよ、臆面おくめんもなく」

咲希の右隣に座った女性が吐き捨てるように言った。

ひそかに横目でうかがう。席札に書かれた名が新郎と同姓の『飯塚』であるからして、きつと親族の一人だろう。

その向かいに座った女性が「ほーんと」と眉根を寄せて女に同意した。こちらの席札は新婦と同姓の『佐々木』であった。

「四度目の結婚で、ファーストもないもんだわ」

「しかも毎回同じ相手とね。離れたりくつついたり、また別れたり……そこまでは好きにすりやいいけど、いちいち籍を入れるのはなんでのよ」

「一度目の結婚が二十歳で、そこから六年の間に四回だもんね、四回！ わが身内ながら頭がおかしいとしか思えないわ」

彼女たちは声をひそめる様子もなかった。

司会の大声が、二人の愚痴をつかの間だけかき消す。

「ここでお待ちかねのシャンパンオープンでございます。今回はたつての希望により、新郎の大輔さんみずから開けてくださいます。

せーの！」

派手な音をたててコルクが吹き飛んでいく。泡がぼたぼたと垂れ落ち、新郎新婦がはしゃいだ笑い声をあげる。

しかし招待客は皆、白けた目を向けるのみであった。

咲希の横で、女性二人がふたたび嘆きだす。

「いたたまれない。穴があったら入りたい」

「どうせ今回の結婚生活だって半年もたないに決まってるのに、なんなのこの茶番」

「お兄ちゃんと千絵梨さんの友人間での渾名知<sup>あだな</sup>ってる？ そのまんまよ、『祝儀泥棒』、『幸せになるなる詐欺』」

「言いたくなる気持ちわかるわ。でも友人なら疎遠にできるからましよ。今回はさすがのお姉ちゃんでも友達と同僚の招待は諦めたけど、あたしたち妹は問答無用の強制参加だもんね」

「馬鹿の妹に生まれたってだけで、一生馬鹿に振りまわされなきゃいけないなんてね。ひどい話よね」

しんみりと二人はうなずきあった。

ウェイターの手によってシャンパンが次々とグラスに注がれていく。制服をきつちり着込んだウェイターたちは、すでに全身汗みずくた。

「ビールがいい」

呻<sup>うめ</sup>くような声がどこからか聞こえた。

まったくだ、と咲希も思う。甘くて気の抜けたシャンパンなんかより、きんきんに冷えたビールをジョッキで一気飲みしたい。ビアガーデンだと思えば、この暑さにもなんとか耐えられる——ような気がする。

「乾杯！」

自棄<sup>やけ</sup>気味に、主賓の新郎伯父が声を張りあげた。

シャンパンなんて、と思っていたのに咲希は一息に飲みほしてしまった。渴いて水分を求めていた体に、いや五臓六腑<sup>ごぼうろくのぶ</sup>に染みわたる。

「ビール！」

「こつちにもビール！」

「烏龍茶！」

あちこちから切羽詰まった声があがった。当然だ。フルートグラス一杯のシャンパンでは、とうていこの渴きは満たされそうにない。

飛びかう蚊や羽虫を手で追いはらいながら、ウエイターが大急ぎでガーデンテーブルの間を飛びまわる。ウエイトレスが運んできた前菜の皿にも、容赦<sup>ようしや</sup>なく虫がたかついていく。

「では新郎新婦はお色直しのため、しばしの中座となります。皆様、温かい拍手でお送りくださ——」

「ちよつと待ったあ！」

司会の台詞を、うわずった男の声がさえぎった。

全員の目がいつせいに声の主へと集まる。中庭を突っ切って大股で駆けてくる若い男がいた。スーツ姿ではない。Tシャツにジーンズだ。

男は叫んだ。

「千絵梨！」

新婦がこぼれんばかりに目を見ひらく。かたや新郎は呆気にとられ、棒立ちであった。

咲希のななめ向かいに座る新婦妹が呻いた。

「うわ、あれってお姉ちゃんが去年付き合ってた男じゃん……」

最悪、と彼女が頭を抱えると同時に、

「千絵梨、おれだー！ 一緒に逃げようー！」

と男が金切り声をあげる。

おそらくここで新婦の親族なり、列席者の誰かが体を張って男を止めていれば、映画の『卒業』ばりの場面が見られたのかもしれない。

だが客たちの三分の一はただ驚いており、三分の一は興ざめし、残りの三分の一は暑さにやられてそれどころではなかった。

男は誰に邪魔されることなく新婦のもとへ行き着き、

「さあ千絵梨！」

と彼女の腕を掴んだ。新婦があたりを見まわし、

「え、なに？ なにこれ、サプライズ？」

とスタッフに助けを求める目を向ける。

だがふいに、その視線が一点で止まった。

その顔つきに、なぜか咲希ははっとした。しかし振りかえって彼女の目線の先を追う前に、われに返ったらしい新郎が声をあげた。

「な——なんだきみは！ 無礼だぞ、人の妻に！」

「妻だあ？ 三度も彼女を幸せにできなかった男が、なにを偉そうに！」

「なんだと、聞いたふうな口を利くな！」

新郎が片腕を振りあげた。

「おい、その従業員！ なにをぼさつと突っ立ってるんだ、早くこの邪魔者をつまみ出せ！」

新郎の罵声に応えるかのように、ウェイターたちがようやく動くだった。しかし誰も彼も動きが鈍い。見るからに、足が脳の命令に付いていっていない。

「そりゃあそうよね。この炎天下でろくな水分補給もなしに、詰襟つめえりみたいな黒の制服で働かされてちゃ」

百合香が同情に堪えぬ顔つきで言う。

気づけば新郎と乱入男は掴み合いになっていた。かろうじて動けるらしい数人のスタッフと、涼しい室内を行き来していたウェイトレスがあたふたと割って入る。

新婦が「やめて、やめて」と言いながら、新郎のタキシードの裾を掴んで引いた。その手を新郎は乱暴に振り払った。

ヒールのせいか、新婦がバランスを大きく崩す。

「あっ！」



咲希は短く叫び、思わず立ちあがった。

止める間もなかった。新婦は高砂代わりのメインテーブルへと、無防備な体勢で頭から突っこんでいった。

テーブルごと彼女は横転した。

陶器の割れる音が響いた。テーブルクロスがひるがえる。花が散乱する。

数秒、息づまるような静寂があった。

芝生へ倒れたまま新婦は起きあがらない。それどころか、ぴくりとも動かない。

今度こそ招待客のあちこちから悲鳴が湧いた。冷笑していた新郎新婦の妹たちも、さすがに椅子から腰を上げた。

もつれあっていた新郎と乱入男が、掴みあった姿勢のまま凍りついている。

ウェイターの一人が新婦に駆け寄ろうとした――が、彼は操り人形のように膝をがくりと折り、前のめりに芝生へ倒れた。

つづいてもう一人ウェイターが倒れる。さらにもう一人。彼らは新婦とは違い、あきらかに熱中症であった。

つづいて新郎新婦の親族だという年配の女性二人も、意識を失ってくずおれた。

青扇殿が誇る美しい中庭は、一瞬にして地獄絵図と化した。

「救急車だ！ 一一九番！」

「誰か、担架持ってこい！」

「いや無暗むやみに動かすのはまずいぞ、救急車が来るまでそっとしておけ！」

スタッフたちが右往左往する中を、招待客たちが誘導に従って屋根付きの能舞台まで避難する。

しかし咲希は縫いとめられたように、その場から動けずにいた。

「なにしてんの、咲希。ほら、日陰に行くわよ」

「あ……う、うん」

百合香にうながされ、のろのろと歩きます。

——あれは、目の錯覚だろうか。

確かに見た。いや、見たように思った。

裾の長いドレスに隠れて死角になってはいたが、新婦がバランスを失った瞬間、狙いすましたように横から飛んできた脚を。

——誰かが、わざと転ばせた。

サイレンの音が近い。どうやら救急車が到着したようだ。

いっそう周囲が騒がしくなる。他の披露宴会場からも、野次馬が続々と集まりつつある。

咲希はぎくりと足を止めた。

——そうだ、やっとわかった。

例のウエイトレスがどうしても目に付くのか。なぜ彼女に違和感を覚えてしまうのか。

制服のサイズが合っていないから？ おかしな披露宴に限っていつも姿を見かけるから？ いや違う。あのウエイトレスだけが、胸に名札を付けていないのだった。

その刹那、<sup>せつな</sup>咲希の脳裏に浮かんだ脚が——新婦を転ばせた脚が、女の細く白い脚に取って代わった。

そうしてその脚は、ウエイトレス用の黒い膝丈のスカートをはいていた。

咲希は呆然とあたりを見まわした。

### 3

新婦がわざと転ばされたのではないかという疑いは、駆けつけた救急隊員に一応報告しておいた。

だがウエイトレスへの疑惑は、さすがに誰にも言えなかった。なにしろ確証はなにひとつないのだ。証拠なしに密告まがい真似をするわけにはいかない。

「あの新婦、まだ意識不明らしいわ」

翌日、百合香からそうLINEでメッセージが届いた。

咲希は仰天<sup>ぎょうてん</sup>し、慌ててレスポンスを打ち込んだ。

「つてことは重傷なの？ まさか重態？」

「ううん。蔵野さん情報では、脳波は異常なしだそうよ。血腫<sup>けっしゆ</sup>や挫<sup>ざ</sup>傷<sup>しよう</sup>があるわけでもないから、なぜ目覚めないのかは原因不明だつて」

「そうなんだ……」

「いまは市民病院の準集中治療室にいるらしいわ。でも緊急性はな  
いとみて、昏睡<sup>こんすい</sup>から目覚めるかどうかにかかわらず、近いうちに普  
通の病室へ移すみたい」

「早く目が覚めるといいけどね。せっかくの新婚なのに」

「四度目を新婚と言っているいかどうかは不明だけどね。でも旦那さ  
んは例のダステイン・ホフマン気取りの男の件は不問にして、献身  
的に枕もとで彼女の覚醒<sup>かくせい</sup>を待ってるって話よ。不幸な事故だったけ  
ど、かろうじて救いもあったわね」

「そういえばあの『卒業』騒ぎってやっぱり、醍醐<sup>だいご</sup>リカさんが仕組  
んだサプライズだったの？」

「それがよくわからないのよ。少なくとも彼女は否定してる。新郎  
も親族も知らないって言ってるから、関係者の依頼じゃないことは  
確かみたい」

「じゃあ本物だったんだ、あの男」

「本物というか真性というか」

百合香が呆れ顔のスタンプを送ってきた。

「ところで咲希、次のバイトの件について、いまのうち連絡しとくね。再来週の土曜、アンジェレノに午前十時集合。今回はいつもと違って、披露宴だけじゃなく二次会にも出席しろってさ」

「二次会？　じゃあ集まるのは友人関係ばかりか」

「そう。だから事前にダミーのスマホを支給するからね」

「ダミーのスマホ……ってなに？」

咲希は困惑顔のスタンプを押した。

すかさず百合香から返信が送られてくる。

「二次会といえば出会いの場でしょ。でもあたしたちはほら、サクラだから。『番号教えて、ID教えて』となったとき、渋ったり断ったりして場の空気を悪くしないよう、ダミーのスマホでもって交換しとくの」

「ははあ」

「もちろん後日連絡とろうとしても、繋がらないけどね。万が一、新婦に問い合わせがいたら『酔ってスマホ落としちゃったみたい』とでも伝えてもらえばいいのよ」

「信用するのかしら、そんな言いわけ」

「しようがしまいが、たいていはそこで脈なしとみて引っぱむわよ。向こうだって大人だし、それ以上しつこくしたら恥をかくのは自分

だってわかってるしね」

「そんなもんかな」

咲希は首をかしげた。

でもまあ百合香が言うならそうなのだろう。認めるのは情けないが、彼女のほうが格段に世慣れている。とても同い年とは思えない。

階下から母の声がした。

「ちよっとお姉ちゃん、いつお風呂入るの？ お父さんが帰ってくる前に、ちやっちやと済ませちゃってよ」

「あ、はい。いま行く」

咲希はスマホへ向き直り、

「ごめん。お風呂入るから今日はこれで」

と正直に打ち込んだ。つづけて、こうも打つ。

「じゃあ再来週土曜の十時、アンジェレノね。ドレスの色決めたらまた教えて。それから飯塚千絵梨さんの意識が戻ったら、そのときも教えて」

間髪を容れず、百合香から「了解」のスタンプが返ってきた。

「合路、お昼行ってきます」

隣席の同僚に声をかけて、咲希はオフィスを出た。

いつもは節約のため弁当を持ってきているが、今朝は不覚にも寝坊してしまい、朝食さえ食べられなかった。コーヒーに砂糖とミルクをたっぷり入れて午前中はしのいだものの、さすがに限界だった。空腹で目が回りそうだ。

——ここは久々に、『マチネ』のランチかなあ。

ビストロ『マチネ』は一見お洒落だが、安くて量が多いことで有名な店である。

とくに名物なのは箸で切れるほど柔らかい牛タンシチューで、ランチではいつも限定五食とされているため、よほど早く行かなければありつけない。

「いらっしやいませえ」

出迎えた愛想のいいウエイトレスに、一応牛タンシチューについて訊いてみた。だが残念ながら「すみません、今日はもう」との返事であった。

「御一人様でよろしいですか？　では奥の御席へどうぞ」

エアコンの効いた涼しい店内を横切り、壁際のテーブルへと案内される。

通路のなかばで、咲希の足がはたと止まった。

「——シロちゃん？」

間違いない。奥まった四人掛けのテーブルに腰かけているのは、愛しの幼馴染みこと今居史郎であった。

「おう」

なぜか彼がばつ悪そうな表情を浮かべ、片手を挙げる。

だが史郎の向かいに座っているのは、女性ではなく同年代の男性であった。咲希に見られたところで、とくにまずい相手とは思えない。

「シロちゃんもランチ？ うわあ、お昼に会うなんて珍しいね、奇遇だね」

意識せずとも弾んだ声が出た。

常とは違い、今日のこれは正真正銘の偶然だ。やはり運命、赤い糸、などという言葉が咲希の脳内を駆けめぐる。

しかし肝心の史郎はいたってそっけなかった。

「サークルの仲間と、ちょっとな」

彼の向かいに座る男が、ぶしつけなほど咲希を上から下まで眺めまわしてくる。

「どうも。今居くんと同じ社会人サークルのメンバーで、柳田やなぎだと言います」

「は、はじめまして。シロちゃ……今居さんの、元同級生の合路です」



咲希は深ぶかと腰を折り、頭をさげた。

そういえば史郎が去年からまたバレーをはじめたらしい、とは洩れ聞いていた。しかし「練習、どこでやってるの」、「試合はするの」と何度聞いても、史郎は言葉を濁す<sup>じ</sup>だけで答えてはくれなかった。

——これはチャンスだわ。

史郎がどこの体育館もしくは会館で練習しているのか、チームではどんな様子なのか、はたまた応援に押しかけてもいいものか、根掘り葉掘り聞きだす絶好の機会だ。そしてあわよくば練習の見学に行きたい。ひさしぶりにバレーをしている彼が見たい。

「あの、よろしければ、わたしも同じテーブルで……」

「悪いな。柳田と大事な話があるんだ」

史郎が間髪容れず言う。

「いや、おれはべつにかまわないぜ」

慌てて言う柳田を横目に、史郎はいま一度「悪い」と咲希に向かって念押しするように繰り返した。

さすがの咲希でも、そこまで言われては諦めるしかない。落胆を顔に出さぬよう「わかった」と微笑んで、店員が案内してくれたテーブルへ腰をおろす。

——やけ食いしてやる。

笑みをかき消して咲希は思った。

なによ。あんなにいやがることないじゃん。べつに奢おごれなんて言  
いやしないのにき。いくら大事な話があるにしても、あの態度つて  
つれなすぎやしない？

メニューをひらく。どうやら本日のランチは「前菜三品盛り合わ  
せ、赤ワインソースのローストポーク」であるらしい。そこへパン、  
サラダ、スープ、コーヒーもしくは紅茶が付くコースだ。

咲希は近づいてきた店員へ、

「本日のランチと、単品で牛タンシチュー添えオムライス」

とためらわずオーダーした。

安いランチセットでは限定でも、単品でなら牛タンシチューの注  
文は可能なのだ。むろん本来の予算とカロリーを倍ほど超えるが仕  
方がない。わたしは悪くない、シロちゃんが悪い、と胸の内だけで  
ひとりごちる。

横目で見ると、史郎と柳田はともに本日のランチコースを頼んだ  
ようだ。

淡々とローストポークをフォークで口に運んでいる史郎に、柳田  
が神妙な声音で切り出すのが聞こえた。

「あのさ、じつは聞いて欲しい話ってのは——いまの彼女と、結婚  
しようか迷ってるんだ」

思わず咲希は耳をそばだてた。

ここでもまた結婚<sup>うんぬん</sup>云々の話題か、と同時に驚嘆がこみあげる。どうやら今年はとことん結婚と将来について考えねばいけない時期らしい。材料は与えるから模索せよと、天が示唆<sup>しき</sup>しているのしか思えない。

そんな咲希の内心も知らず、柳田は指を組んで言った。

「……なんていうか、不安要素が多いんだよ。こういう言いかたはあれだけど、彼女ってちょっと、甘えたところがあるんだよな」

「甘えたところ？ 金銭感覚とかか？」

史郎が訊きかえず。

「いや。それなら論外」

と柳田はかぶりを振って、

「男も家事を半分やるべきだとか言うんだよ」

「は？ べつにおかしかねえだろ。共働きなんだから」

「馬鹿言え、おれのほうが収入は多いんだぜ。向こうは拘束時間だけ長い安月給なのに不公平だろ。それに女の仕事なんか、たかが知れてるじゃんか」

「家事を全部して欲しいなら専業主婦になつてもらえよ」

「専業主婦？ はは、よせよ。おれは寄生虫を養う趣味はないよ。

このご時勢、女だってやつぱり自立してなきやな。いまだき男に依存するだけの女なんて流行らんぜ」

さつきと言ってること違うじゃん、と咲希はいち早く運ばれたス  
ープに口を付けながら思った。

「女の仕事なぞたかが知れてる」と言った舌の根も乾かぬうち、働  
いているイコール自立していると認めるような口ぶりは何ごとか。

——好きじゃないな、こういう男性。

まあお近づきになる気はないからいいけどさ、とフオークでサラ  
ダを強めに数回突き刺しておく。

「不安要素はほかにもあるよ。あいつ、男を立てるってことをしな  
い女なんだ」

柳田がため息まじりに言う。

「おとなしくははい言ってるやいいのに、いちいち反論してきて  
小うるさいんだよな。そういうのって、男を一番萎<sup>な</sup>えさせるよなあ」

運ばれてきたコーヒーをぐいと呷る。

「そういや彼女って三箇月に一回美容院へ行くらしいんだけどさ、  
一回につき二万円近くかけるって言うんだぜ？ がっかりだよ。一  
見地味づくりだから、まさかそんな金食い虫だと思わなかった。結  
婚後はきつく言ってやめさせなきゃな」

「やめさせるって、まさか髪も切らせない気か」

史郎が呆れたように言う。

しかし柳田は笑って、

「既婚になったらもう飾る必要はないんだから、化粧もヘアカットも必要だろ。おれ以外の男に見せるわけじゃなし、自分で切つときゃいいんだよ」

「自宅で鏡見ながら切れって？ セルフで？」

「なにかおかしいか？ うちのおふくろはそうしてるぜ。ああそうだ、おふくろに彼女を仕込んでもらえばいいんだな。それがいい、一からしつけないおしてもらうか」

「ははは、と高笑いがあがる。」

「まあいいさ。せいぜいいまのうちに生意気な口を叩かせておくよ。一度うちの人間になったら、そうはいかんがな」

「……でもまだプロポーズはしてないんだろ。必ずしも彼女がイエスと言うとは限らないんじゃないか」

「は？ 断るわけないさ。あいつもう三十近いんだぜ？ 今居おまえ、三十前にすべりこみセーフしたがる女の焦りを知らねえな？」

「そこまで聞いて、咲希はさすがに呆れた。」

話を聞く限り柳田の彼女とやらは働いているようだし、自分の意見を明確に言うタイプで、身なりもきちんとしているようだ。よしんば結婚にこぎつけたとしても、とうてい彼の言うがまま従う女性とは思えない。彼の言い草には、怒りよりむしろ哀れを感じてしま

——はからずも男性側の結婚観を聞いちゃったけど、複雑な心境  
だわ。

「お待たせいたしました。こちら本日のランチ、前菜三種になりま  
す」

「あ、はい」

ウエイトレスの声に顔を上げる。

コーヒーを飲み終えた史郎と柳田が、伝票を持ってレジへ向かう  
のが見えた。

その夜は珍しく、史郎のほうから「いま時間大丈夫か。行ってい  
いか」とLINEが届いた。

「いいよもちろん！ 大歓迎！」

メッセージを送るやいなや、咲希は大急ぎで化粧をし、首まわり  
の伸びたTシャツから可愛いルームウェアに着替え、畳に散乱した  
雑誌や雑貨のたぐいをまとめて押し入れへ放りこんだ。

次いで階下へ走り、丸盆に麦茶ポットとグラスをセットする。自  
室への階段をふたたび駆けあがる。

十分と経たず、史郎は右手に『くるみゆべし』の箱をぶら下げて  
やって来た。

「今日は悪かったな、聞き苦しいものを聞かせちゃった。これは先

週行った仙台北張の土産だ」

「ありがとう」

咲希は土産を丁寧に受けとって、「……あの柳田さんって人、大丈夫だった？」とおそろのおそろ尋ねた。

史郎がしかめ面になり、畳へあぐらをかく。

「あいつ、言ってることおかしかっただろ。三箇月前からあの調子なんだよ。……言っとくがおれがおとなしく付き合っただけってのは、べつにあいつの意見に同意してるからじゃないぞ。ガス抜きのためだ」

「ガス抜き？」

「柳田の彼女——というか、柳田が彼女だと思っている女性のためにだよ。溜めこむ一方だと、いつか爆発しちゃうかもしれないからな」

「ということは、ほんとうは彼女ですらないの」

咲希は身を乗りだした。妄想であの言い草だったとしたら予想以上だ。もはやストーカーの一步手前ではないか。

史郎は麦茶のグラスに口を付けて、

「正確に言えば一箇月ほど付き合っただけ。しかしすぐに彼女のほうでやばいと勘づいて、別れ話を持ち出したらああなっちゃったそう」

「シロちゃんは、女性のほうとも知り合いなのね」

「同じサークルの女子部の子だよ。おれが一番柳田と歳が近いし、よく話すんで相談されたんだ」

相談された、の一言に咲希はかるいジェラシーを覚えた。しかし心配と不安の念が、嫉妬をすぐに凌駕りようがしてしまう。

「その人の安全ってちゃんと確保されてるの？ 対策はしてるの」「自宅はさいわい知られていないし、実家住まいだから父も兄貴も犬もいるそうさ。サークルの行き帰りは女子部員数人でガードしてもらってる。一応交番へも相談に行ってもらったよ。まだ事件が起こったわけじゃないから警察としては動けないが、なにかあればすぐ駆けつけてくれるとき」

史郎は眉間に深い皺を刻んで、

「柳田の母親が『いい人はいないの。早く身を固めて孫の顔を見せて』と口ごからうるさいらしいんだ。そのプレッシャーもあって、あそこまでおかしくなっちゃったのかもしれない。男にしては珍しく結婚願望の強いやつだとは思ってたが、まさか犯罪沙汰を心配しなきゃならん羽目になるとは……」

とため息をついた。

つられるように咲希も吐息をついてしまう。

「結婚って、なんなのかしらね……」



短い沈黙が流れた。顔をあげると、史郎が驚いた顔で彼女をまじまじと見つめていた。咲希は慌てて両手を振った。

「ごめん、辛気くさいこと言っただけ。あのほら、わたし最近、例のブライダルなんかとかのバイトをはじめたでしょう。その関係で、結婚について見聞きしたり考える機会が増えたから、つい」

そこで声のトーンを落とした。

「だから、なんかよくわかんなくなっちゃって」

「なにがだ？」

史郎が問いかえず。

「え？」

不意を突かれ、咲希はきよんとした。史郎が腕組みして言う。

「その『わからなくなった』ってのは、世間一般における結婚の概念が理解できなくなったってことか？ それとも自分の中の結婚観が揺らいだって意味か」

あらためて問われ、咲希は考えこんだ。

数秒悩んだ末、

「うーん、たぶん両方」

と答えた。こめかみにきつく指をあてる。しばし逡巡したが、すぐに吐は決まった。

——よし。この際、全部シロちゃんに打ち明けちゃおう。

確かにこのバイトはあまり誉められたものではない。いまだ気がとがめ、後ろめたさが拭いきれないでいる。

だから彼には「サクラ要員をやっている」以上の説明はしてこなかった。中島夫婦のありように驚いたときはつい愚痴ってしまったが、化粧室の怪異やウエイトレスの件については一度も相談してこなかった。

——でもいいや、シロちゃん相手に秘密を抱えつつづけているほうがしんどいもん。

それにすこしくらい呆れられたところで、いまさら完全に嫌われることはない——と思う。それなりに二人の絆というか情というか、とにかく簡単には壊れない歴史があると信じたい。

咲希は微妙に視線をそらしたまま、小声でそっと切り出した。

「あのね、シロちゃん。……話があるんだけど、聞いてもらっていい？」

返事を待たず、一気呵成に咲希はしゃべった。

そもそもは五十代の新婦、恒子つねこさんに感激してバイトをつづけようと思ったこと。風変わりな新郎新婦にばかり遭遇すること。プランナーの醍醐リカのこと。百合香の愛車の中で壮絶な話を聞かされ、泣かれたこと。

二十五年前に青扇殿の化粧室で自殺した新婦のこと。「結婚は当

人同士の問題」なんて綺麗ごとだと断言されたこと。名なしのウエイトレスのこと。炎天下で倒れ、いまだ昏睡状態の新婦がいること――。

無言で最後まで聞き終えてから、史郎はゆつくりと言った。

「やっぱり、手放して推奨できるバイトではねえな」

「う……」

咲希はうつむいた。

「でも、いいさ。おまえがやると決めたことなら口出しはしない。

自分のことは自分で判断できるやつだと思ってるしな」

史郎が腕組みを解いて指を立てた。

「ただ、ひとつたつ助言していいか」

いやだなどと言えるわけがない。咲希は身を縮めて「どうぞ」と言った。

史郎は麦茶で唇を湿して、

「この世に幽霊なんてもんはいない、つてのがおれの考えだ。べつに完全否定するわけじゃないが、もしいるとしたらそれは個々の心の中だけにだと思ってる。次に、名なしのウエイトレスとやらの件に首を突っこむのは勧めない。でもどうしても気になるんなら、せめて顔を真正面から見て覚えとけ」

「どういふこと？」

咲希は目を細めた。

史郎がかぶりを振る。

「深い意味はない。ただその会館の制服を脱いだあとでも、見分けられるようにしといて損はないってだけだ。それから最後にもうひとし」

すこし声を低め、彼は静かに言った。

「——その澤石さわいし百合香さわいしって女を、あまり信用しすぎるな」

史郎が帰ってしまったあと、咲希は化粧を落とし、もとのTシャツに着替えて布団へ横になった。

百合香から借りた漫画に手を伸ばす。見るともなしにぱらぱらとめくる。しかし次第に物語へと没頭し、つい真剣に読みふけてしまった。

「やだ、二階堂先輩にかいどうってほんと素敵……」

われ知らず、そんな慨嘆がいたんまでもが洩れる。

だが仕方がない。ヒロインが恋するこの二階堂先輩はとにかく格好いいのだ。

長身かつスタイル抜群の美形で、家柄が良く、文武両道の優等生。ヒロインに対しての言動は基本クールだが、根底では優しい。発する台詞はいちいち気障きざったらしく、不幸な過去まで背負っていると

いう、設定てんこ盛りのいかにも少女漫画らしいキャラクターである。

「……百合香も、この二階堂先輩萌えて全巻買ってるのかなあ」

だとしたら正直言つて意外だ、と咲希は思う。

彼女が知っている百合香は現実的でシビアで、女性らしい外見に似合わぬ強靱なメンタルの持ち主だ。たった二箇月弱の付き合いではあるが、少なくとも男性アイドルや少女漫画にきやあきやあ言うタイプではないと断言できる。

——澤石百合香って女を、あまり信用しすぎるな。

史郎の台詞が鼓膜の奥によみがえる。

なぜ、と訊きかえしたが、史郎ははっきりとした答えは返してくれなかった。ただ「たいした根拠はない。念のためだ」と言うだけだった。

咲希は天井の木目に視線を流し、漫画を閉じた。

まぶたを静かに下ろす。

シロちゃんと百合香のどちらを信じるかと問われたら、答えは決まっている。まず付き合いの長さが違う。思い入れの濃さも、重ねてきたエピソードの数だって段違いだ。

——でも。

「でもわたし、百合香のこともけっこう好きなんだよね……」

ひとりごちて、咲希は閉じた漫画を布団の横へ積み重ねた。

なんとはなしに背表紙を眺める。

——『恋愛の神様』 ながせ なぎ 永瀬凪

どこかで聞いたようなタイトル、と胸の中で言い終えぬうち、咲希の意識は睡魔にさらわれていった。

〈つづく〉